

自立への努力

年表	
年代	重要な出来事
1864	ブリガムシティーで協同組合事業が始まる
1867	扶助協会の活性化が図られる
1867.12	ソルトレーク・シティーに預言者の塾が組織される
1868.10	全教会レベルで協同組合事業が始まる
1869.5	シオン協同組合商事が正式に発足する
1869.5.10	大陸横断鉄道がユタ準州プロモントリーサミットで接合する
1869 70	「新しい運動」とも呼ばれた背教グループ「ゴドビー派」が活動始める
1874.2	共同制度実施への動きが始まる

◀1869年5月10日、ユニオンパシフィック社(右)とセントラルパシフィック社(左)の機関車がユタ準州プロモントリーサミットで接合し、大陸横断鉄道の全通を祝う式典では、黄金の犬釘が打ち込まれた。

中央で握手をしているのは、セントラルパシフィック社の主任技師サミュエル・S・モンタギュー(右)と、ユニオンパシフィック社の主任技師グレンビル・M・ドッジ(右)。この式典に集った人の数については500人から3,000人までと様々な推定があるが、何枚かの写真から推測すると500から600人の間と思われる。

ブリガム・ヤングの代理として、オグデン市長ローリン・ファーが出席した。ブリガム・ヤングはこのときユタ南部に滞在していた。

南北戦争の後、教会の指導者たちは前にも増して、自立することの重要性と、それが聖徒らに経済的および霊的な力を与えることを再認識した。それは特に大陸横断鉄道の延伸について言えることであった。これによってユタはもはや隔絶の地ではなくなったのである。この時期に、教会がこの世界的な影響から守られて自立するために、幾つかの方法が講じられた。

初期の段階

ブリガム・ヤングは早くも1850年代から鉄道の延伸を促進したいと考えていた。それが実現すれば、グレートベースンへの移住が楽になり、移民にとって大きな助けになると考えていたからである。教会員でない指導的な立場の官吏たちも「鉄の馬」がユタ準州を通過するように望んでいた。それは鉄道によって富を蓄積できるというだけでなく、大陸横断鉄道がユタまで延びてくれば教会は崩壊するだろうと確信していたからであった。彼らのその確信は、ブリガム・ヤングは教会員に服従を強いている邪悪な独裁者なのだという誤った考えに基づくものであった。そのために彼らは、鉄道が来れば、それは抑圧された末日聖徒たちが東部の自由な社会へ逃れるための便利な手段になると考えたのである。彼らがそう考えていることを聞いたヤング大管長は、自分の説く教えが「一本の鉄道に耐え得ないとしたら、それは確かに貧弱な宗教と言わざるを得ない」¹と語った。

政府の指導者たちは、ブリガム・ヤングと彼に従う人々が、労働者たちが非常なスピードで鉄道建設を進めるのを熱意と期待をもって待ち受けていることを知らなかった。しかし教会員たちは東部での様々な経験から、ユタのプロモントリーサミットでの連結を目指して、大陸の東西両側から延びつつあるレールと枕木が様々な現実的な問題を運んでくるということを知らないわけではなかった。

鉄道によって準州にさらに多くの教会員でない人々が来ることを認識していたブリガム・ヤングは、預言者の塾を再び組織し、協同組合制度を奨励し、教会の補助組織の活性化を図った。預言者の塾は、教会の教義と方針の面で兄弟たちを強化するために1867年に組織された。ヤング大管長は経済的な事柄についての判断で兄弟たちの助けを望んでいた。彼は聖徒たちがある程度経済的な自立を維持できるよう、準州内の産業と協同組合事業の新興を考えていたのである。預言者の塾には、教会の様々な集会の内容を高め、偽りの教義の喧伝を最小限に抑えるという目的もあった。²

預言者の塾はソルトレーク・シティーのほかに、ローガン、オグデン、ブリガムシティー、プロボ、パロワン、そのほかの主要な入植地においても組織された。ブリガム・ヤングは自立した経済を目指し、この組織を通して自分たちの同胞である

時満ちる時代の教会歴史

聖徒から商品を購入するよう教会員に奨励した。家内工業も奨励され、教会員は衣類、食品を自ら作り、鉄工製品の組み立てまで行った。また聖徒たちは、絹、綿、亜麻の生産も行った。さらには独自に石炭の採掘を行い、紙の製造も行った。ぼろ切れを原料に作った紙もあった。

預言者の塾の活動にはほかに、永続的移住基金の資金獲得活動、反教會的商人に対する不買運動、プロボ毛織物工場の建設、また東部から流入する商品に対してユタで製造される商品の価格競争力維持のための人件費抑制、そしてソルトレーク・シティーからオグデンまでの鉄道建設促進事業などがある。

預言者の塾は教会員に対して、家屋、庭、公道の美化を奨励し、シオンの民がほんとうに世の光となれるよう、正直、清潔、整頓^{せいとん}などが強調された。聖徒たちが自らの経済的状态を固め、個人の財産を管理し、キリストに従った生活をする一方で、鉄道が彼らを囲む山岳地帯を貫き始めていた。

1868年にブリガム・ヤングは、預言者の塾の代表として、ユニオンパシフィック鉄道会社の役員との間で契約書を交わした。それは、鉄道のルートがエコーキャニオンからソルトレーク・シティー間、あるいはエコーキャニオンからオグデン間と決まった場合に、その建設工事を請け負うという契約であった。預言者の塾は幾つかの理由で、この契約には利点があると考えていた。第1は、鉄道建設者用のキャンプに付き物の数々の問題を回避できるという点であった。そのようなキャンプの風紀は、建設労働者たちを誘惑し、彼らの収入をねらって、鉄道の後についてくる賭博師、売春婦、悪漢などによって乱されていた。第2は、「その契約によって得られる収入が、確実に教会と教会員に行く」ということであった。第3は、「ユタが鉱物資源に富んでいるという評判をすばませることにより、好ましくない非モルモンの流入を最小限にとどめる」ことであった。そして第4は、それによって末日聖徒が必要としている多くの雇用機会が得られる点にあった。³

エズラ・T・ベンソン、チョーンシー・ウエスト監督、オグデンステーク会長のローリン・ファーなどを含む名の知られた教会員たちも、ネバダのフンボルトウェルズから東へユタのオグデンに向かう200マイル（約320キロ）の鉄道敷設請負契約に署名した。このようにして、準州内の何百人もの住民が職を得たのである。1869年3月8日にユニオンパシフィック鉄道がオグデンまで敷設されたとき、地元住民たちは多くの旗をもって祝い、建設作業員たちを歓迎した。ある旗には「国民を結ぶ交通路に万歳！ ユタによろこそ！」と書かれていた。⁴

ユタ準州オグデンの北西53マイル（約85キロ）のプロモントリーサミットで東西から延びてきた鉄道が接合されたのは1869年5月10日であった。最後に敷かれた枕木はカリフォルニア産の月桂樹で銀の銘板が打ち付けられ、その上には歴史的なその偉大な出来事を祝う碑文が刻まれていた。午後12時47分に大きなハンマーを用いて、セントラルパシフィック社のリランド・スタンフォード社長とユニオンパシフィック社のトーマス・C・デュラント副社長が鉄の釘を打ち込んだが、打ち損なってしまった。それでも、電信によって合衆国大統領ユリシーズ・S・グラントに最後の犬釘が打ち込まれたことが伝えられた。サンフランシスコでは祝砲がとどろき、合衆国の各地に、この歴史的な出来事を喜ぶ声が上がった。⁵ このときブリガム・ヤングは準州南部に足を伸ばして聖徒たちを訪ねている最中で、式典には出席しなかった。

自立への努力

準州内の輸送網をさらに改善し、また教会員に雇用機会を与えるために、大管長会はワードの監督たちや準州測量技官ジェシー・W・フォックスの助けを得て、大陸横断鉄道の通過点であるオグデンとソルトレーク・シティーを結ぶ構想をユタ・セントラル・レールロード社に持ちかけた。1869年5月17日、この路線の起工式が行われた。ただしこの式では、農業を重視する聖徒たちの思いを表すために、つるはしではなく農業用のシャベルが用いられた。レールの敷設は1870年1月10日に完了した。ブリガム・ヤング大管長がユタ産の鉄でできた最後の犬釘を打ち込むのを見るために、何千もの人々が集った。

この路線の建設の後にも、教会の支援によってプロボや南部入植地を通過するユタ・サザン・レールロード社の路線、そしてユタ・ノーザン社による、はるか北の地モンタナ州ビュートの路線の建設も行われた。

それまで連邦政府はユタ準州民に対して土地の権利証書の発行を実施していなかった。そのために、鉄道が延伸するにつれ、住民たちの間には自分たちの保有する土地に対する不安が高まった。「鉄の馬」によって準州における末日聖徒以外の人々の数が大幅に増加した場合、土地の所有に関する明確な証書がないために、土地の所有権もそれに付着する財産の権利も拒否されるおそれが多分にあったのである。それまで明確な土地の権利証書もない状態で長年にわたり平穏な生活を維持してきたのは、互いに協調し合って生活する聖徒たちの能力を示すものである。例えばカリフォルニアでは牧場主と所有権獲得の目的で公有地を占拠する人々の間で争いが多発したが、それとは対照的に、ユタでは教会外の人々がやって来ても土地を巡る問題が起こることはごくまれであった。

聖徒たちの不安が次第に大きくなったために、1869年に預言者の塾は塾の内部で「土地問題について学び、鉄道会社がその所有権を要求している自分たちの土地を守るために取るべき段階を人々に知らせる」ために一つの委員会を設置した。⁶（これはグレートベースンへの入植を望む他の人々にも当てはまる問題であった。）「この委員会は預言者の塾に対して定期報告をし、土地所有権の登記申請に関して、準州各地の入植者を援助するために人員を派遣した。」⁷ 彼らの働きによって、人々が不当な不利益を被ることは最小限に抑えられた。

議会が発した命令によって、鉄道会社に通行権が与えられるのは個人の財産権がすでに確定している以外の土地と決定していた。預言者の塾のこの委員会は準州各地の住民を訪れ、土地所有権の登記申請について援助を与えた。

1865年10月の総大会においてブリガム・ヤングは、末日聖徒は経済的に助け合う必要があるという発表をした。彼は次のように宣言した。「男性も女性も、すべての末日聖徒は、自分たちの忠実な兄弟たち以外からは物を買わないと心に決めてください。彼らはそうして得たお金で良いことをします。わたしたちが自立を図ることは神の御心です。もしそれをせずに、神と聖徒以外のところから助けを受けているかぎり、わたしたちは必ず滅びてしまうからです。……わたしたちは自らを守らなければなりません。敵は固い決意をもってわたしたちを滅ぼそうとしているのです。」⁸

1868年にヤング大管長は再び、次のことを注意深く説明した。「〔わたしたちは〕この〔教会外の商人たちとの〕取り引きから離れ、外部の人々を富ますことよりもほかの目的のために自分たちの財産を大切にしなければなりません。わたしたちは



ユタ州歴史協会の厚意により掲載

鉄道接合の式典に用いられた有名な黄金の犬釘は、サンフランシスコのデビット・ヒューズが寄贈したものである。4つの面には、鉄道会社役員の名前、この犬釘の寄贈者の名前、および祝賀の言葉が刻まれていた。式典の後にこの犬釘はヒューズ氏に返還され、彼は1892年にこれをスタンフォード大学に寄贈した。



19世紀の末日聖徒の間で、什分の一事務所は経済的な面において非常に重要な役割を果たした。当時の什分の一はほとんど現物あるいは労力によって納められていたために、什分の一事務所は地元でできる産物や製造品が入手できる雑貨店のような機能を果たしていた。これは1860年代の、ソルトレーク・シティーのデゼレトストアと什分の一事務所である。テンプルスクウェアの東にあるホテルユタ(現在のジョセフ・スミス記念館)の敷地に建っていた。

時満ちる時代の教会歴史

自らの財産を、福音を広め、貧しい人々を集合させるために用いなければなりません。また神殿を築き、困っている人々を支え、自分たちの家を作り、わたしたちから得たものをわたしたちの不利益のために使う人々に与えるのではなく、もっと良い使い方をするように変えなければなりません。」⁹ その後教会の指導者たちは、聖徒たちの経済的安定に対する脅威を防ぐために、教会員が地元で運営し、教会が監督する形の協同組合事業の展開を奨励した。

末日聖徒による最初の協同組合事業は、1864年に十二使徒定員会のロレンゾ・スノー長老の指示の下にブリガムシティーで開始されてかなりの成功を収め、1860年代におけるその後の教会の協同組合事業のモデルとなった。スノー長老は1854年にブリガム・ヤングにより、ボックスエルダーの聖徒たちを管理する任を受けてそこへ派遣されていた。このボックスエルダーは1864年にブリガムシティーと改名された。その年の秋、ヤング大管長とスノー長老はブリガムシティーにおいて共同制度の原則の実施について長い時間をかけて討議していた。ヤング大管長は『教義と聖約』に示されている奉獻の律法の原則を実施したいと長年にわたって強く望んでいた。そして今、経済的自立が強調されるに至り、ブリガムシティーがそれを開始する理想的な地として浮上したのであった。

スノー長老はヤング大管長にあてた1875年の手紙の中で、自分がその協同組合事業の大きな目的としているのは「人々の利益とその資産を結びつけることにより、彼らの気持ちを一致させ、〔大管長の〕教えの精神に基づいて彼らを自立させ、異邦人の店から独立させることです」¹⁰と説明している。

まずロレンゾ・スノーは、協同組合による雑貨店の組織を管理した。彼はこの商業協同組合事業を、ブリガムシティーの経済生活全体にわたる組織、またブリガムシティーの自立に必要な産業の発展の基礎として活用することを目指していた。さらに株式組織の会社が作られ、ブリガムシティーの全会員に対して株の購入が勧められた。町でただ一つの店として、その会社は間もなく出資者に対して利益還付金を出すようになる。しかし、利益の多くは家内工業への再投資に向けられた。最初に作られたのが皮なめし工場であった。出資者たちの労働によって建設され、その道に熟練したイギリス人改宗者によって管理された。これに続いて靴の製造工場も建てられ、革製品の製造業が興された。その後の数年の間にほかにも様々な産業が興され、ブリガムシティー全体が経済的に自立するようになった。この協同組合事業の成功と評判は合衆国全体に知られるようになり、アメリカにおける協同組合運動を研究していた有名な著述家エドワード・ベラミーがブリガムシティーを訪ね、ロレンゾ・スノーと数日を過ごし、この組合の活動状況について学んだ。

1868年にヤング大管長はシオン協同組合商事（Zion's Cooperative Mercantile Institution：ZCMI）という経済システムを確立した。当時も広く知られていたように、このZCMIの目的は、準州内に商品を流通させ、できるかぎり安い価格で販売し、「その利益をあまねく人々に分配する」ことにあった。¹¹ また、理事たちは標準小売価格を設定する権限を与えられ、すべての店舗がそれに従うように求められた。それらの価格は「妥当な」ものでなければならず、「売る側と人々全体の両方の満足と利益につながるものであった。」¹² 統一小売価格の目的は価格競争を抑えることではなく、過度の価格のつり上げを防止することにあった。1869年冬、その価格表の最

自立への努力

ソルトレーク・シティーのシオン協同組合商事（ZCMI）は、後に準州全域に広がった系列販売店の本部であった。近年になって、創建当時の鋳鉄製の正面玄関部分が復元された。



初のものが、「シオン協同組合商事の管理者は状況に応じて変更することを許されるという了解の下に発表された。」¹³ 後にZCMIは、ブーツ、靴、作業ズボン、コート、ベスト、オーバーシャツ、アンダーシャツ、男性用下着などを製造する独自の工場を持つまでになった。¹⁴

ソルトレーク・シティーに本店が開かれてから6週間のうちに、準州内で81の協同組合店舗が営業を開始した。各地の聖徒たちは1株以上の出資を行うように奨励された。やがて、ユタ、アイダホ南部において150以上の店舗が開設されるまでになった。これらの店舗は末日聖徒による事業のほとんどすべてを扱っていた。

準州の州都ソルトレーク・シティーでは、ほとんどのワードがそれぞれに協同組合の店舗を持ち、その多くが製造事業体を設けて出資者に利益を還付した。牧畜を行う人々は牛、馬、羊などを協同組合事業方式の中で飼育し、品種改良用の家畜を輸入して質の向上を図った。¹⁵ 聖徒たちが1873年の全国的な恐慌の影響を感じ始めるまで、この協同組合方式は自立という教会指導者の目標達成に大きく寄与したのである。幾つかの協同組合は20世紀に至っても活動を続けた。

扶助協会の活性化

1867年には預言者の塾が再組織されたが、ブリガム・ヤング大管長はそれと同時に教会の扶助協会も再組織した。彼は家内工業と経済的自立を促すための動きの中に姉妹たちを積極的に参加させようとした。そして日々の生活の中の誘惑に耐えるにはどうしたらよいかを教え、また地元の富を準州内にとどめ、経済成長を促すためには自分たちの衣類や生活用品をどうしたらよいかということについても、互いに教え合うように奨励した。ブリガム・ヤングがエライザ・R・スノーをその会長に

時満ちる時代の教会歴史



エライザ・Ｒ・スノー（1804 - 1887年）は1835年に福音を受け入れた。彼女は福音に対する固い忠誠心を表して、聖徒たちに慰め、安らぎ、啓発を与え、その生涯を通して「シオンの女流詩人」として名を知られた。エライザはノーブーで扶助協会が最初に組織されたときの書記であった。ユタでは、エンダウメントハウスにおける姉妹たちの働きをまとめる責任を果たした。彼女は2代目の中央扶助協会会長として、1867年から始めて20年間その任を果たした。



デゼレトアルファベットによる第2学年用読本の表紙、実際のデゼレトアルファベットが印刷されている。デゼレトアルファベットは1853年10月に、ヒーバー・Ｃ・キンボール、パーリー・Ｐ・ブラット、ジョージ・Ｄ・ワットで構成される委員会によって始められた。このアルファベットはおもに、ジョージ・Ｄ・ワットの考案によるものである。この読本と、そのほかに『モルモン書』を含む何冊かの本が1870年以前に出版されている。

召したときに、人々は扶助協会の重要性を再認識させられた。エライザ・Ｒ・スノーは当時の教会の中で、最も尊敬されていた女性だったと思われる。ブリガム・ヤングは姉妹たちに「病気の人、助け手の要る人、貧しい人を訪問して、その人々の必要を知り、監督の指示の下に彼らを助けるのに必要なものを集めるように」望んだ。¹⁶ また姉妹たちは女性のぜいたくをなくしたり、政治的な問題について教えたり、反モルモン的な法律の制定に対して請願や陳情活動を行うことなども期待された。

さらにシオンを強める

ユタにやって来る改宗者たちの言語が多岐にわたっていたために意思の疎通が困難な状況にあり、英語の定期刊行物を読むことのできない人々もいることを認識していたヤング大管長は、しばらくの間新しい音標文字を普及させようとしたことがある。彼はこの新しい文字によって、聖徒の一致が促進すると信じていた。そして何人かの兄弟たちに、デゼレトアルファベットと呼ばれる新しい音標文字を考案するように依頼した。ビットマンの速記法の発音と文字を参考にして、この兄弟たちはすぐにデゼレトアルファベットを完成させた。そしてヤング大管長はこの新しい文字で、『モルモン書』と幾つかの学校用教科書を印刷することを承認した。オーソン・ブラットは1869年に『モルモン書』をこの新しい文字で書き表し、小さな版型のものが出版された。

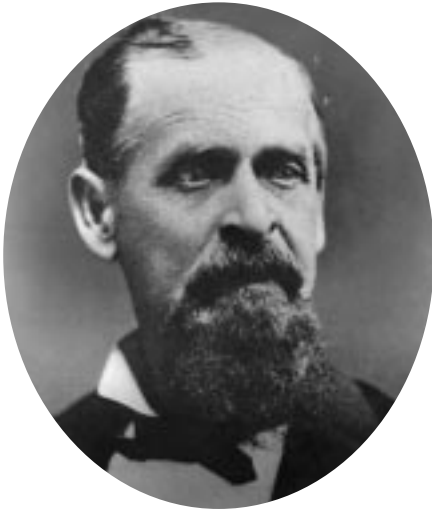
ヤング大管長は子供たちの読み書きの習得を楽にし、学校で使う時間を最小限にするとあって、この新しい文字の利点を説いた。また彼はこれによって、外国人改宗者が英語の学習に使っている時間を減らすことができるとも語った。入門書が印刷されてからこれを教えるための講習が行われ、聖徒たちにこの文字を実際に使わせるための様々な試みがなされた。しかし間もなく、この新しい文字は利点よりも難点の方が大きいということが分かり、実験は断念された。

聖徒たちが一堂に会して指導者の教えを受けることのできる適切な建物があれば、聖徒たちを霊的に強めることができると信じていたヤング大管長は、そのような建物を建設する準備を始めた。何度か評議会を持った後に、ヤング大管長の心の中にドーム型の大きな礼拝堂の姿がくっきりと浮かび上がってきた。そのビジョンを現実化するために、彼は自分の執務室にヘンリー・グローを呼んだ。ヘンリー・グローは、熟練した水車建築家であるとともに優れた機械工でもあった。ブリガム・ヤングはちょうどそのころ、グロー長老がジョーダン川に架かる木製のアーチ型橋梁^{きょうりょう}を完成させたところを目撃した。アーチ型橋梁とは、三角形とアーチ形の木製の枠をうまく組み合わせることによって全体を支える構造の橋で、橋の中央部には橋を支えるものがなく、かなり珍しい建築物であった。ヤング大管長は、自分が心の中に描いていたドーム形の巨大な建築物の屋根を支えるには、連続した橋梁構造、また木製の橋梁の技術が必要と考えていた。

建築士ウィリアム・Ｈ・フォルサム^{フォルサム}の助けを得て、ヤング大管長とヘンリー・グローは計画されていた最初のタバナクルの建築試案を立てた。外周部が、間口150フィート（約46メートル）、奥行き250フィート（約76メートル）、高さ80フィート（約24メートル）という、この種の建築物としては世界最大級のものであった。人々の目を最も強く引きつけたのは、支柱が1本もない状態で支えられた巨大な天井であった。

自立への努力

今日の末日聖徒が知っているドーム型のタバナクルが建設される以前、教会員はこの写真に写されている旧タバナクルに集った。旧タバナクルの右手に見えるのが北側の仮集会所で、天気の良い日にはここに大勢の聴衆が集まった。最初のタバナクルの建設は1851年5月21日に開始された。この建物は1852年4月6日に完成し、ウィラード・リチャーズ副管長によって奉献された。その後、1870年に取り壊されて、その跡地にアッセンブリーホールが建てられた。



水車建築家であり橋梁建築家であったヘンリー・グロー（1817 - 1891年）は1842年に教会に加入した。彼はタバナクルのトラス部の建築の責任を負っていた。



ジョセフ・ハリス・リッジス（1827 - 1914年）は、イギリスのあるオルガン工場の近くで生まれ育った。彼の家族は1851年11月にイギリスを後にして、オーストラリアへ移り住んだ。オルガン製作に対する彼の関心は、やがて教会に祝福をもたらすことになった。リッジス兄弟は1853年11月15日にオーストラリアでバプテスマを受けた後にユタへやって来た。タバナクルが公開された時点では、オルガンはまだ3分の1しか完成していなかった。その後長年かけてこのオルガンは作り直され、また電化され、規模もさらに大きくなっていった。



そのようなドーム式屋根の建設が実行可能かどうかを疑問視する人々が聖徒やそのほかの人々の中にもいたため、ヤング大管長はそれらの疑問に答えるためにタバナクルの模型の制作を指示した。タバナクルの建設は1863年の春に始まった。

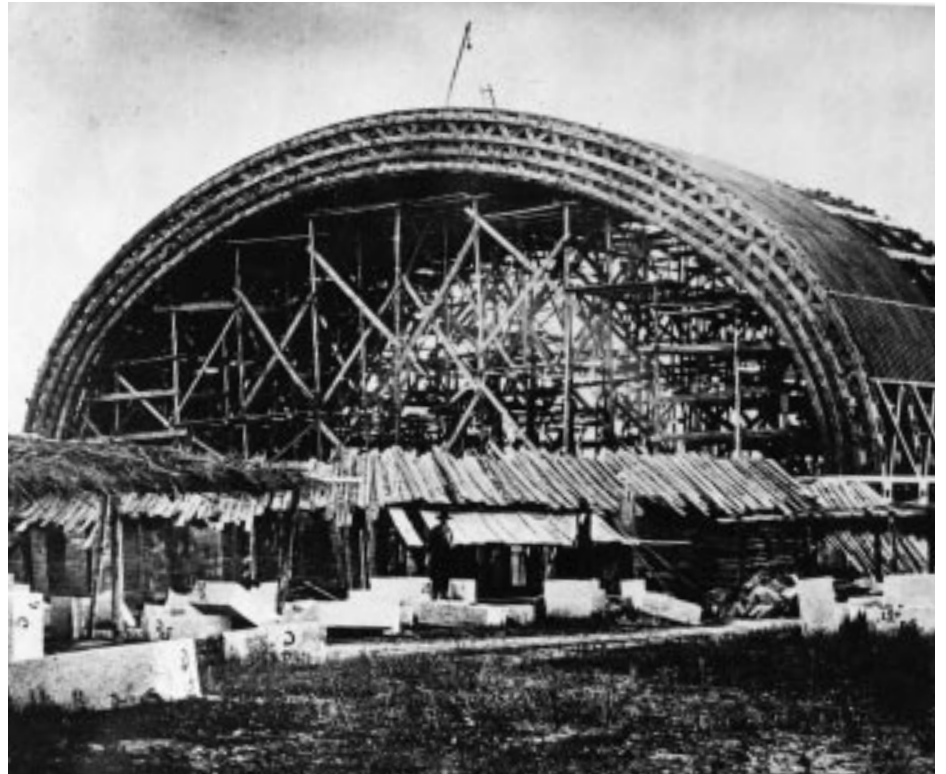
タバナクルとその世界に名だたるオルガンは、10月に行われる総大会の使用に十分間に合うよう、1867年の秋には完成の運びとなった。オルガンやそのほかの内部の造作の工事が完了したのは1870年以降のことであった。栈敷席の工事は1870年に始まった。この栈敷席によってタバナクルの音響効果が改善され、収容能力も増えた。この栈敷席は、幅が30フィート（約9メートル）、長さが全長480フィート（約146メートル）で、タバナクル内部の3方をつないで増設され、72本の柱で支えられた。そして完成したタバナクルは1875年10月の総大会において、十二使徒定員会会長ジョン・テラーにより奉献された。

オーストラリアで改宗したジョセフ・ハリス・リッジスは、自分が製作した小型のパイプオルガンをユタへ持って来た。リッジス長老という人物とそのオルガン製作技術について知らされたヤング大管長は、彼にタバナクルの最初のオルガン製作者の任を与えた。大きな問題はオルガン製作に適した木材を見つけることであった。やがてふさわしい木材がソルトレーク・シティーから南へ300マイル（約480キロ）の、ユタの山岳地帯であるパロワンのパイン峡谷で見つかった。

このパイプオルガン用の大木の切り出しと運搬は、1800年代の当時においては決して楽な仕事ではなかった。林道を建設したり溪流に橋を架けなければならなかったからである。そのうえ、この仕事のほとんどは有志者の働きに頼らなければならなかった。時には、各3頭の牛が牽引する20両もの荷車が、木材の切り出しと運搬のためにこれら遠くの山岳地帯まで旅をすることもあった。リッジス長老は20か月足



建築工事中と竣工時のタバナクル。卵の殻を思わせるタバナクルのユニークな建築様式は、間口150フィート（約46メートル）、奥行き250フィート（約76メートル）、高さ80フィート（約24メートル）の張間に屋根の部分を支える、巨大な橋梁式のトラス構造である。



ウィリアム・ハリソン・フォルサム（1815 - 1901年）は1842年にニューヨーク州で福音に改宗した。聖徒たちとともにノーブーに到着した後、彼はノーブー神殿で建具工として働いた。1861年10月にソルトレーク・シティで開かれた総大会において、彼は教会建築士として支持を受けた。そして自分自身の要望によって解任された1867年4月までその任にあった。しかしその後、教会建築士補佐の任にあった。

ウィリアム・フォルサムはソルトレーク劇場、市庁舎、タバナクル、マンタイ神殿などの建築士である。ウィリアムは七十人、ソルトレークステーキ高等評議員、ソルトレークステーキ副会長、宣教師、祝福師などの職を務めた。

らずの間にオルガンを完成させ、1867年10月の総大会の演奏に十分間に合わせることができた。この大会では、ユタのペyson、スプリングビル、スパニッシュフォークの合同合唱団が大会の一部で歌い、また、ロバート・サンズの指揮の下に新たに組織されたタバナクル合唱団が、日曜日の集会で歌った。このときを始めとして、タバナクル合唱団は年々その質を高め、今日世界的な名声を得るに至っている。

広がり続ける福音

ヤング大管長や聖徒たちが山々の頂でシオンの確立に忙しい日々を送っていた間にも、教会は世界の他の地域において成長し続けていた。しかしそれに反対する動きがなかったわけではない。

オーストラリア、メルボルン出身の宣教師、ロバート・ビーチャム長老は、ニュージーランドのウェリントンで腐った卵を投げつけられた。彼は別のときには、天の御父の計らいによって危害を免れたこともあった。天の御父は、タールと羽根を塗り付けようとしていた邪悪な者たちの目から、彼をかくまわれたのである。暴徒や『ウェリントンアドバタイザー』（*Wellington Advertiser*）という新聞の激しい攻撃があったにもかかわらず大会が開かれ、聖徒たちは「御霊を豊かに受けた。」¹⁷

クヌート・ピーターソン長老の報告によると、スカンジナビアでは1871年に1,021人がバプテスマを受けて教会に加入した。そしてこう続けている。「この冬は、地元出身の数多くの長老たちが宣教師に召された。スウェーデンとノルウェーでは、教会の長老たちが福音の儀式を執行したことを理由に有罪判決を受け、投獄されるという状態が続いていた。しかしスウェーデンでは、伝道集会に多くの人々が集った。ノルウェーでは、キリスト教のすべての宗派に対して信教の自由が認められていた

自立への努力

が、最高裁が末日聖徒イエス・キリスト教会はキリスト教ではないという理不尽な判決を下していた。」そのために末日聖徒は信教の自由を認められていなかったのである。また、ノルウェーの聖徒たちは貧しい生活をしていたが、その年に630人の会員がシオンへ移住するのに十分な金銭を調達した。¹⁸

エドワード・シェーンヘルドは、スイスの宣教師たちの様子を「クローバーの葉のように一つにまとまっている」と伝えている。彼らは教会に対する大衆紙の歪曲報道わいきよくと闘うために、福音の原則を分かりやすく説明したパンフレットを出版しようと奮闘していた。¹⁹

1872年の暮れ近く、スイスにいたある長老は、スイスの聖徒たちは宗教を実践しようと努力し、宣教師を助けるために最善を尽くしているとの報告をしている。彼はまた、短い間に27人にバプテスマを施し、10人の子供に祝福を与えたと付け加えている。

ジョージ・ネベカー長老は、彼がハワイで働いている間に100人以上の人々が改宗してバプテスマを受けたために集会所がとても手狭になり、そのために聖徒たちが新しい集会所建設のために忙しく働いていると報告している。ハワイ諸島では、1872年の下半期6か月の間に全体で600人以上の人々が教会に加入した。1872年の春の大会には700人以上の聖徒が出席したと報告されている。病気の人々が癒され、知恵の言葉に対する従順が強調された。²⁰

一方、1869年から教会は移住して来る聖徒たちに、シオンへの旅を始める前に、それに要する費用を納付するように求めた。それ以前は、ほとんどの場合「教会の幌馬車」(雄牛が牽引する幌馬車がウィンタークォーターズで移住者を迎え、彼らをソルトレーク・シティーまで連れて行く方式)による旅程の部分については支払猶予期間が与えられていた。グレートベースンにいる聖徒たちはそれぞれの友人や親戚の移住を助けるために、「ウェールズ基金」「スコットランド基金」といった基金を作り、英国諸島からシオンへ集合する人々を助けるためにそれらの基金を教会役員に寄託した。ワードの初等協会が子供の移住について献金をしたこともあったが、恐らく最も一般的なものは、友人や親戚からの援助であった。彼らは教会の事務局に現金を寄託し、旅費の調達ができたことを知らせる通知とともに、その金額の小切手を移住希望者に送付してもらうという方法を取った。

背教への対処

残念なことではあるが、すべての会員が教会の指導者と彼らが掲げた経済的自立策を支持したわけではなかった。中には背教していった人々もいたのである。ブリガム・ヤングが協同組合事業を推し進めていたころ、モルモンの事業家や知識人の中には彼の方針に公然と異を唱える人々がいた。彼らは「自由主義者」と自称していた。

彼らの指導者ウィリアム・S・ゴドビーにちなんで「ゴドビー派」と呼ばれたこの一派は、全国の教会外の商人たちに協力を呼びかけ、ユタは農業や牧畜よりも、富をもたらす天然資源として鉱業を重視すべきだと主張した。その意見の発表の場となったのが、彼らが1868年に創刊した『ユタマガジン』(Utah Magazine)であった。

教会の指導者たちはゴドビー派の人々を何とか改心させようと努め、彼らの何人



ウィリアム・S・ゴドビー(1833 - 1902年)は青年時代にイギリスで福音に改宗した。彼はユタで傑出した商人となり、準州屈指の金持ちになった。彼は市議会議員、自分の地元の七十人定員会の会長、第13ワードの副監督などを務めた。

時満ちる時代の教会歴史

かに伝道の召しを与えた。しかしそれらの召しは拒まれ、彼らが公にする批判の声はさらに激しさを加えていった。この問題について話し合うために彼らは預言者の塾に召喚された。しかしこれは不愉快な対面という結果に終わっただけであった。さらに何度か一致のための試みがなされた後に、ソルトレークステーク高等評議会は「新しい運動」とも呼ばれていたこの派の指導者たちを告発した。そして彼らは教会から破門される結果となった。1870年に彼らは「シオンの教会」という名の独自の教会を興し、自分たちの定期刊行物を『ソルトレークトリビューン』(Salt Lake Tribune)という反モルモンの日刊紙に発展させた。ソルトレーク・シティーの非モルモンの指導的立場にある人々と手を組んで、彼らは教会の政治的活動に反対するために「自由党」を結成した。

「新しい運動」は1870年までに、元使徒で独自の入植地建設を試みていたアマサ・M・ライマンを自分たちの戦列に取り込んだ。アマサ・M・ライマンは贖いに関して偽りの教義を説き、降霊術に傾倒して1867年に十二使徒から離脱していた。ライマンは「シオンの教会」の中で降霊会を行った。「シオンの教会」は人々の支援を得られずに、1873年までにはつぶれていたが、自由党は生き長らえて1893年に至るまでユタの政界を混乱させる種として存続した。

共同制度

協同組合事業に関して成功を得たブリガム・ヤングをはじめとする教会の指導者たちは、それよりも優れた経済制度を実施したいと考えた。1872年10月の総大会においてジョージ・Q・キャノン長老が、3年半にわたる協同組合事業の成功は、「エノクの制度」を実施したとき得られるであろうさらに価値ある結果を象徴していると述べた。

キャノン長老は、「末日聖徒の中に富める者と貧しい者がなくなり、また富が人々を誘惑することがなくなってすべての人が自分自身を愛するように隣人を愛し、すべての男女が自身とほかのすべての人々のために働く」という、そのような時を来らせるためには、この新しい制度が必要であると述べた。協同組合制度は「もっと完全な段階へ進むための踏み石」にすぎなかったのである。そして「天にある〔より高度な制度が〕地の人々によって実施され、喜びをもたらす」のである。²¹

ブリガム・ヤングも大会の翌日の話の中でこのテーマを採り上げた。そしてその後の数か月間、教会中央幹部は聖徒たちに共同制度の確立に向けて備えるようにとのメッセージを与え続けた。

1874年には、共同制度の実施を促す幾つかの要因が見られた。預言者ジョセフ・スミスと親しく交わったブリガム・ヤングとほかの中央幹部たちは聖徒たちの間に改革を起こし、奉献の律法の原則を確立し、実施したいと強く望んでいた。アメリカ合衆国を恐慌が襲った1873年、聖徒たちは、自立への努力にもかかわらず、自分たちの経済が国全体の経済動向に強く影響されていると思い知らされた。このために教会の指導者は、末日聖徒にも及ぶ将来起こる可能性のある経済変動の影響を和らげるために、「エノクの制度」を確立し始めようとした。

また、当時ユタの南部の村落の人々の生活は、ネバダ州ピオーチ付近に本拠を置いた鉱業会社の出現によって数年来混乱が続いていた。聖徒たちの間に流通してい

自立への努力

た建築資材や食糧が鉱山業者の需要に吸収されたために、モルモンの共同体にそれらの物資の不足が起こっていたのである。若い人々の中には、現金収入を得るために家を離れて鉱山町へ行く者もいた。そこで彼らはこの世的な様々な影響にさらされた。これによって若者たちが減り、労働力に不足を来した所もあった。

セントジョージでは特に経済の振興が必要とされていた。そのためにブリガム・ヤングはこの地で、最初の共同制度を組織した。その運営委員会は、おもにステークと各ワードの監督によって構成されていた。セントジョージの共同制度グループが最初に実施したことの一つは、北部入植地との間の物資輸送の監督であった。その後間もなくこのグループは家禽類や豚の群れの飼育を始め、セントジョージ神殿の建設にも貢献した。グループの各メンバーは霊性を守るために14の規則に従うことで合意していた。その規則には、神の名をみだりに唱えない、さらに完全に知恵の言葉に従う、愛と思いやりをもって家族に接する、純潔の律法に従う、安息日を聖く過ごす、過度に飾り立てた服装をしない、などということが定められていた。各会員は再度のバプテスマを受けることによって、これらの規則に従う意志を示した。

シオン全体に共同制度を確立する条件が整ったと判断したブリガム・ヤングは、セントジョージをモデルとして南部の全入植地を組織するために、教会の指導者たちを派遣した。ヤング大管長は4月の総大会において、すべての教会員に共同制度の実施を説く計画をしていたが、天候が悪化して道路の通行が思うようにいかなかったために、総大会が予定されていたときまでにソルトレーク・シティーに戻るができなかった。このため大会は5月の第1週まで延期された。預言者はソルトレーク・シティーに到着するとすぐに、ソルトレーク・シティーのワードにおける共同制度の実施に取りかかった。4日にわたる総大会の期間中、席上話された12以上の説教を通して、共同制度が生み出すあらゆる効果についての説明がなされた。

1874年の年末までに、200以上の共同制度グループが各地の末日聖徒の入植地で組織された。その中にはアイダホ、ネバダ、アリゾナの入植地も含まれていた。人口が多いオグデン、プロボ、ローガンでは、それぞれ複数のグループが組織され、各グループはそれぞれに異なる独自の生産事業を興した。ソルトレーク・シティーの20のワードはそれぞれが一つの共同制度グループを形成した。ブリガムシティーと他の地域は、同じモデルに従って協同組合の事業網を維持した。この方式の場合、各人は協同組合事業において保有する株のほかに、独自の私有財産を所有した。

人口が750人未満の小さな地域では、規模に応じて変化を持たせた別のタイプの共同制度が行われた。この方式では、各人がその地域の生産物を平等に分け合い、全員が統制のよく取れた一つの家族として食事を含めて共同生活をした。その最も有名な例が、1875年に24の家族によってユタ南部のケイン郡オーダービルで始められたグループであった。この町はそれまでの5年間で、人口が700人に達していた。協同作業によって「集合住宅が幾つか建設された。それは町の広場を囲むとりでのように配置され、中心部には大きな共同食堂が建設された。」²² このグループは、店舗、製パン所、納屋などを建て、農場、果樹園、畜産、また家具の制作などの様々な製造業も行った。この人々は全員がオーダービルで作られた同じスタイルの衣服を着、全員の生活が一様に向上しないかぎり、一人だけの生活が良くなるということはない。このグループは10年にわたって協力と愛のモデルとして存続したが、1885

時満ちる時代の教会歴史

年の反多妻婚にまつわる迫害の激化によってついに終息するに至った。オーダービル建設のために働いた人々は、統制のよく取れたクリスチャンとしての共同体生活の中にあった幸せな思い出を、心からの懐旧の念をもって回顧し続けた。

一般的に、多くのグループはあまりうまくいかなかった。国全体の経済不況に加えて、利己心や運営上の失敗などもあって、1877年までにはほとんどのグループが共同制度を解消した。中には、1880年代の一連の政治上の問題によって解散を余儀なくされるまで存続したグループもあった。

にもかかわらず、シオンにおける10年に及ぶ協同組合事業と共同制度の実施は幾つかのすばらしい業績を残したのである。聖徒たちは以前に比べて準州外からの物資に依存しなくなり、外部からの商品の流入量は劇的に減少した。そして家庭における生産と、製造業、小売事業に対する地元投資額が格段の増加を見せた。聖徒たちの間における貧富の格差も小さくなった。倏約と勤勉の徳がはぐくまれ、それは幾世代にもわたって教会の祝福となった。そして経済的自立のための様々な試みは、労力と資材の提供という面においてセントジョージ神殿、ローガン神殿、マンタイ神殿、ソルトレーク神殿の建設に大きな貢献をしたのであった。

注

1. サミュエル・ボウルズ, *Our New West* 『新たに変わる西部』(Hartford, Conn.: Hartford Publishing Co., 1869), 260で引用
2. レナード・J・アーリントン, *Great Basin Kingdom: An Economic History of the Latter-day Saints, 1830 - 1900* 『グレートベースンの王国——末日聖徒の経済史』1830 - 1900年 (Cambridge: Harvard University Press, 1958), 245 - 251参照
3. アーリントン 『グレートベースンの王国』246 - 247
4. ジョセフ・ホール “Railway Celebration at Ogden” *Deseret Evening News* 「オグデンにおける鉄道開通式典」『デゼレト・イブニング・ニュース』1869年3月9日付, 2
5. ジョン・J・スチュアート, *The Iron Trail to the Golden Spike* 『鉄路はゴールデンスパイクを目指して』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1969), 225 - 227; リロイ・R・ヘーフエン, W・ユージン・ホロン, カール・コーク・レスター, *Western America* 『アメリカ西部』(Englewood Cliffs: Prentice Hall, 1970), 405 - 406参照
6. Journal History of The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints 『日誌で見た末日聖徒イエス・キリスト教会の歴史』1869年3月20日, 教会歴史記録部, ソルトレーク・シティ
7. アーリントン 『グレートベースンの王国』249
8. *Journal of Discourses* 『説教集』11: 139で引用
9. 『説教集』12: 301で引用
10. トーマス・C・ロムニー, *The Life of Lorenzo Snow* 『ロレンゾ・スノーの生涯』(Salt Lake City: Deseret News Press, 1955), 317で引用
11. ブリガム・ヤング, *ZCMI First Record Book* 『シオン協同組合商事, 最初の記録』議事録A, 17において引用。アーデン・ピール・オルセン “The History of Mormon Mercantile Cooperation in Utah” 「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」博士論文, カリフォルニア大学, 1935年, 80で引用
12. 『最初の記録』19。オルセン「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」81で引用
13. オルセン「ユタにおけるモルモン協同組合商事の歴史」93
14. アーリントン 『グレートベースンの王国』308 - 309参照
15. レナード・J・アーリントン, フェラモルト・Y・フォックス, ディーン・L・メイ, *Building the City of God* 『神の町を築く』(Salt Lake City: Deseret Book Co., 1976), 108 - 109参照
16. “Female Relief Societies” 「婦人扶助協会」『デゼレト・イブニング・ニュース』1867年12月6日付, 2
17. “The Church in New Zealand” *Millennial Star* 「ニューージーランドにおける教会」『ミレニアルスター』1872年1月9日付, 25

自立への努力

18. 『ミレニアルスター』 1872年1月30日付 , 75 - 76
19. 『ミレニアルスター』 1872年2月20日付 , 125
20. 『ミレニアルスター』 1872年11月5日付 , 714
参照
21. 『説教集』 15 : 207 , 209で引用
22. アーリントン 『グレートベースンの王国』 334